一写一筆　静岡の今　114

富士山の「怖い顔」

2月23日は「富士山の日」である。「そうか、2 2 3（ふじさん）だものね」と語呂合わせで納得する向きもあるが、静岡、山梨両県にはれっきとした「富士山の日条例」があり、同日を「富士山の日」と定めている。

その趣旨は「世界に誇るべき国民の財産であり、豊かな恵みをもたらしている富士山について理解と関心を深め（中略）富士山を後世に引き継ぐことを期する日」（静岡県富士山の日条例1条）とされる。

堅苦しいことを言わないで、「私と富士山」に思いを巡らせる日であってもいい。

筆者の富士山の思い出は41年前の1980年（昭和55年）に家族4人で登った富士登山である。昔から富士山が出現したのは庚申（かのえさる）の年と言い伝えられ、60年に1度の庚申は「御縁年（ごえんねん）」として、各地の浅間神社では今も盛大な祭りが行われる。1980年は縁起のいいその年に当たるため、家族連れの「お山参り」で静岡、山梨県の各登山口は平年よりにぎわっていた。

登山者を悪夢が襲ったのは、よく晴れた日の昼下がりだった。同年8月14日午後1時50分ごろ、富士山の山梨県側8合目から6合目の吉田大沢で大規模な落石が発生、死者12人、重軽傷者29人という大惨事となった。

私たち家族がそのニュースを知ったのは下山した翌日だった。1日違いだったが、背筋が寒くなるような私の富士登山体験談は、事故発生から2日後の朝日新聞1面コラム「天声人語」に引用された。その中で私は「富士を甘くみちゃいけない」と感想を述べている。

美しい富士にも「怖い顔」がある。40年余り昔の話だが「富士山の日」に語り継ぎたい思い出である。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

富士山の「思い出」は……＝裾野市、全日写連・勝又説夫さん撮影